替え玉五十円

私たちの施設の五月祭には、大分市の長浜ラーメン（店名でなく製法地名）も出店、本物希求の入居者たちを大いに喜ばせた。うまい、量も多い。店主のお話―「店のお客はそれでもお代わりされる。汁は残っているから、替え玉の麺をゆでて入れるだけ。五十円ですみます」。ああ、お代わり五十円。店は市場のそば、お昼時は額に汗する生業の人たちでごったがえしていることだろう。

生業とは食べていくための仕事と辞典にあるが、生業はまさしく正業というべきだろう。替え玉といえばだれもが必ず連想する。この国の総理クラスを筆頭に、秘書や妻子を替え玉にして、涼しげに億を単位にフトコロしている政治家たちの悪行を（ラーメン店主はその日の売上金をそっくり施設に寄付。固辞したのに）。

今朝、水蜜桃の宅配。朝露に冷えたままのような配達法も心にくいが、色形美しいだけでなく、驚くほどの美味、日本最高といえよう。改めてラベルを見た。「クリーンピーチ」清川村。栽培法と共に出荷産地、連絡先の番地、電話も明記、すべてがク

リーンだ。

それにつけても昨日スーパーで買ったいちじくはひどかった。色形見かけはよいが、ひと口して家族全員が吐き出したほどのしろもの。大分市農協とのみ記して、すべてに投げやり。数日前の同市のびわだって全く似たりよったり。

名前だけ独り歩きしている大分県の一村一品運動には大きな精神的欠陥がある。一つは倫理性の欠如。もう一つは生産者と消費者が面を向きあう親近性の喪失。倫理性親近性といっても、作る側ももうける、買う側も買い得と喜ぶ、双方が得するごく自然の関係にすぎない。替え玉五十円、清川のクリーンピーチには高い精神性が躍如としているではないか。

「ずっと頂いてきたが、これからは大分蜜柑(みかん)だけは送らないで下さい」と言った東京の知人の言葉は、終生忘れられない。

（一九九〇年七月十一日）